若宮誕生　解答

A　語句の意味

(1) お仕えする。(身分の高い人の)おそばに控える。 ／「あり・をり」「仕ふ」の謙譲語。中宮のおそば近くに控えていることを表す

(2) 目を覚ます。 ／★現代語の「驚く」ではない。「おぼほる(寝ぼける)」とあわせて、寝ぼけて目を覚ますようす

(3) 気の毒だ。かわいそうだ。(「ほほえましい」と取る説明もあるので、お使いの教科書に合わせること) ／眠っているところを起こされる乳母を見ての気持ち。「いとほし」は「気の毒だ」が第一の意味

(4) 頼りない。おぼつかない。(生まれて一か月ほどで、まだしっかりしていない若宮のようす) ／「心もとなし」は、待ち遠しい・気がかりだ・頼りない、と文脈で訳し分ける多義語

(5) 満足する。得意になる。思いのままに気を晴らす。 ／ここは、孫の若宮をかわいがって満ち足りている殿(道長)のようす

(6) かわいがる。いつくしむ。 ／形容詞「うつくし(＝かわいい)」の動詞形。「ささぐ」は高く持ち上げること

(7) のぞいて様子を見る。のぞきこむ。 ／女房たちのいるあたりをのぞきこむしぐさ

B　文法

(8) 「させ」＝尊敬の助動詞「さす」の連用形。「させ給ふ」＝二重敬語(最高敬語)。 ／地の文の二重敬語は、天皇・中宮など、とくに身分の高い人の動作に使う

(9) 尊敬(尊敬の助動詞「す」の連用形)。殿(道長)が自分で乳母の懐を探っている動作で、使役の相手(「〜に…させる」の「〜に」にあたる人)が書かれておらず、下の尊敬の「給ふ」と重なって二重敬語になっているから。 ／「せ給ふ」「させ給ふ」は、使役の相手が見当たらなければ尊敬と考える。四段「さがす」の未然形「さがさ」に「す」がついた形

(10) 終止形＝寝(ぬ)。ナ行下二段活用(ね・ね・ぬ・ぬる・ぬれ・ねよ)。 ／★一字の動詞「寝(ぬ)」は頻出。ナ行変格活用(死ぬ・往ぬ)とまちがえない

(11) 疑問の係助詞(〜か)。結び＝「さぶらふ」、活用形＝連体形。 ／ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形。四段動詞は終止形と連体形が同じ形なので、係助詞から判断する

(12) もとの形＝まして。音便の種類＝イ音便。 ／前に軽い例(光源氏に似た人もいない)をあげて、「まして(紫の上は)なおさら」と強める言い方

(13) 「む」＝推量の助動詞。「いかで〜む」＝反語(どうして〜だろうか、いや、〜ない)。 ／「いかで」は〈疑問＝どうして〉〈反語＝どうして〜か、いや〜ない〉〈願望＝なんとかして〜たい〉の三つ。紫の上が宴の席にいるはずがない、という気持ちなので反語

C　主語・指す内容・敬意の方向

(14) 中宮(彰子)。 ／御帳台は、出産を終えた中宮がいる所。最高敬語「させ給ふ」もヒントになる

(15) 「参り」(謙譲語)＝作者から、殿が参上する先の中宮(彰子)への敬意(会いに行く相手の若宮への敬意とする説明もあるので、お使いの教科書に合わせること)。「給ひ」(尊敬語)＝作者から殿(藤原道長)への敬意。 ／★謙譲語と尊敬語が重なる「二方向の敬語」。謙譲語は動作を受ける人(行く先の人)、尊敬語は動作をする人を敬う。地の文なので敬意の出どころは作者

(16) 御乳母(若宮の乳母)。 ／★若宮ではない。殿が乳母の懐の若宮を探るので、気をゆるめて寝ていた乳母が起こされ、⑥寝ぼけて目を覚ます

(17) 『源氏物語』の女主人公、紫の上(少女のころの呼び名が若紫)。 ／公任の言った「若紫」を受けて、「あの(物語の)紫の上」と言っている

D　口語訳

(18) 殿(藤原道長)は、夜中にも明け方にも(若宮のもとへ)参上なさっては、乳母の懐(に抱かれている若宮)をおさぐりになるので、 ／「殿の」の「の」は主格(〜が・〜は)。「つつ」は反復で「〜しては」

(19) (乳母が)何もわからないまま寝ぼけて目を覚ますのも、たいそう気の毒に見える。 ／「何心もなく」＝何も気づかずに。主語は乳母

(20) おそれ入りますが、このあたりに若紫はおいででしょうか。 ／「あなかしこ」＝ああ、おそれ多い。「さぶらふ」は「あり・をり」の丁寧な言い方(「お控えしている」と謙譲語で取る説明もある)

(21) 光源氏に似ていそうな方もお見えにならないのに、まして(あの)紫の上が、どうして(ここに)いらっしゃるだろうか、いや、いらっしゃるはずがない。 ／「ものし給ふ」＝いらっしゃる。「ぬ」は打消「ず」の連体形。反語は「いや、〜ない」まで訳す

若宮誕生　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 殿が夜中や明け方にもやって来て、乳母の懐にいる若宮を探るので、気をゆるめて寝ていた乳母が、何もわからないまま寝ぼけて目を覚まさなければならないから。 ／③〜⑥の流れをそのままつなぐ

(23) 生まれたばかりの若宮は、殿（道長）にとって、娘の中宮が産んだ待望の孫の皇子であり、夢中になってかわいがるのも当然だと思われたから。 ／「ことわりなり」＝もっともだ・当然だ。「めでたし」＝すばらしい。道長の喜びようを、ほほえましく見ている

(24) 当時すでに『源氏物語』（少なくとも若紫が登場する部分）が書かれていて、宮中の貴族たちの間で読まれ、その作者が紫式部であることも知られていたこと。 ／公任は、作者の紫式部を物語の人物になぞらえてからかった。『源氏物語』のことが書きとめられた、いちばん古い記録とされる

(25) 声に出して答えず、黙って聞いていた。心の中では、ここには光源氏に似た方さえいないのに、まして紫の上がいるはずがないと思い、冗談に乗らずに冷静に受け流していた。 ／はなやかな宴の中でも、一歩引いて場を見ている作者の姿が表れている。記述問題の定番

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 清少納言。代表作＝『枕草子』。 ／紫式部は中宮彰子に、清少納言は皇后定子に仕えた。どちらも一条天皇の后

(27) 藤原公任（ふじわらのきんとう）。作品＝『和漢朗詠集』。 ／和歌・漢詩・音楽にすぐれ、当時の文化人の代表とされた人物

(28) 古典の日。 ／『源氏物語』のことが確かめられる、いちばん古い記録の日にちなむ

【現代語訳（全文）】

十月十日過ぎまでも、（中宮様は）御帳台からお出ましにならない。（私たち女房は）その西側のそばにある御座所に、夜も昼もお仕えしている。殿（藤原道長）は、夜中にも明け方にも（若宮のもとへ）参上なさっては、乳母の懐（に抱かれている若宮）をおさぐりになるので、（乳母が）気をゆるめて寝ているときなどは、何もわからないまま寝ぼけて目を覚ますのも、たいそう気の毒に見える。（若宮が）まだ頼りないご様子でいらっしゃるのを、（殿が）ご自分の心のままに満足して、高く抱き上げてかわいがりなさるのも、もっともなことで、すばらしい。

（誕生五十日のお祝いの宴で）左衛門の督（藤原公任）が、「おそれ入りますが、このあたりに若紫はおいでですか」と、（女房たちのいるあたりを）のぞきこみなさる。（私は）光源氏に似ていそうな方もお見えにならないのに、まして（あの）紫の上が、どうして（ここに）いらっしゃるだろうか、いや、いらっしゃるはずがない、と思って、（黙って）聞いていた。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる